昭和十二年十二月二十四日發行

日印協會報

第六十三號

目次

口絵　○印度ガウハテイの水浴場　○印度アジミヤの物賣　○ラメッシュワラム寺及寺小屋

●第二次日印會商に使して……米澤菊二……一
●昭和十二年前半季對印度南洋貿易概觀……横濱正金銀行頭取　大久保利賢……七
●最近の緬甸貿易事情……府立東京商工奬勵館囑託　大場忠……一四
●極東に於ける日本の地位……スバス・チヤンドラ・ボース……二八
●印度の國民性に就て……木村日紀……四一
●印度音樂から見た世界の音樂……桝源次郎……五〇
●モガル王朝後宮祕話……城南野人……六三
●印度鰐物語……武田豐四郎……七二
●ナンダコート登山日記……濱野正男……八四
●日本印象記……シャンタ・デビ……九二
●印度の旅から……菅儀一……九八
●訪印雜感……伴宗高……一〇四

◎雜　纂……二四

○自一月至九月日本對印度南洋諸國貿易品三箇年對照表○印度の財政○印度小工業の保護○印度に對する錫蘭の市場○印度商人の日本品觀○印度の乳產業○デッカンの『モヘンヂヨ・ダロ』パイタンの遺蹟○日緬日印兩通商條約批准○印度三州の綿メリヤス工業○印度商標法○英領印度對外貿易總計○印度沿岸海運業法案○印度地方議會變動○全印度棉花作柄豫想○自國製品の消費奬勵○孟買綿布市況○英印間の通商交渉と印度の所報○オタワ代用協定の會商終幕○甲谷陀に於ける綿絲布雜貨卸賣價格○印度小工業保護調査○印度の糖蜜生產概況○合同州の鑛山物○印度に於ける日本品ボイコット○本年度の西藏產羊毛○外二十九件

◎會務記事……一五五

○甲谷陀日本商品館組織豫更○理事會兼西館長慰勞會○印度佛跡巡拜團の出發一時延期○米澤前甲谷陀總領事歡迎會○吉田甲谷陀總領事送別會○會員の訃報○新入會員○寄贈出版物○會費領收報告

極東に於ける日本の地位

スバス・チャンドラ・ボース

本文の記者スバス・チャンドラ・ボースは印度革命派の一人に屬し、其言動常に反英的にして、曩に久しく囹圄の中に在りしが、出獄後衆望翕然として彼に歸せり。ベンゴール人より見れば、彼は現代印度政治家中の第一人者なり。

最近日支事變勃發するや、印度人は兎角日本の眞精神を解せずして侮日抗日を主義政策とせる支那人に同情を表し、彼の國民會議派首領ネルーや詩人タゴールの如きも、口を極めて我國を誹謗せり。然るに本文は事件の眞相を歴史的に叙述し、日本の偉大性を認識しつゝも、尙且つ全幅の同情を支那に寄するが如き、吾人の首肯し難き點ありと雖、文中間々印度有識者の意見を窺知するに足る處あるを以て、玆に全譯文を掲げて會員諸彦の參考に資する次第なり。

吾々は時々新聞を開いて、何かしら日本と支那との衝突を讀むことがある。吾々のやうに遠く離れて居る者は、さういふ記事に餘り興味を有たず、他の者は又例の事かと云つて、看過して了ふ。夫れで吾々の中に新聞報道の意義を理解して居る者が、果して何人あるだらうか。

日本人種の母國たる島嶼は、人口七千萬を支へ、人口の過剩に惱んで居る。加ふるに日本人は非常に多産であつて、年々人口が急速に殖えて居る。支那に於ける一平方哩の人口は百人であるが、日本では三百十三人である。其上に日本の出産比例は、英國の二倍である。故に日本は更に國民の住むべき土地を欲し、更に産業に對する原料を欲し、又更に製産品に對する市場を欲して居るのである。誰も斯う云ふ三つの贈物を日本に爲す者が無い。そこで日本は其自力に依らなければならぬ。他の日本の解決策は、産兒制限に由ることであるが、之は日本人の採らざる所である。

日本の發展は、支那、露西亞、英國又は米國の反對に抗してのみ行はれる。日本が亞細亞本土に發展せんと欲せば、支那又は露西亞を怒らしめ、フイリッピン若くは濠洲に發展せんとせば、米國又は英國と衝突せざるを得ない。而も日本は、石丸海軍少佐が其『日本は英國と戰はねばならぬ』に於て、支那、露西亞及米國に近づき、英國と戰ふことに專心しなければならぬと訴へたにも拘らず、遂に別な方途を採るに決したらしい。亞細亞本土に於て日本が欲する土地は、露西亞か支那のものである。露西亞を攻擊するのは、露西亞はソヴエト政治の下に覺醒して居るから、日本に取つては愚な話である。露國は歐洲に於ても、極東に於ても、最新の兵器を有して居る。夫れで日本の帝國主義的野心を滿足させるに最後に殘つたものは、支那を犧牲にして發展することである。日本は支那を犧牲にして發展すると云ふが、後節説明する理由に由り、露西亞の反對を招かざるを得ない。又英國としては、如何に日本の亞細亞大陸に於ける發展を惡むにしても、之を阻止すれば日本は南方に手を擴げて來て、其結果は英國と直接に衝突を惹起し、而して現在のところ米國は、極東に於ける利害を超えて日本と戰爭するやうなことが無いから、此煩累を我慢して居るのである。

日本は亞細亞の一國であり、亞細亞大陸に極めて近いから、其帝國主義的要求を充すべく、先づ亞細亞大陸を見るのは自然である。其處には廣大なる國土—前には中華帝國、今は支那の共和國—政治廢れ、綱紀弛み、而して資源に富んだ國土が在る。此支那の廣大と、埋藏せる富源と、而して內部の無力とが、日本に對して多大の誘惑となつて居る。

亞細亞の二大帝國の衝突は、四十年以來のことである。其最初は前世紀の終末頃であつて、其際日本は武裝を改め、之を近代化して國家の軍備を整備した。當時强大なる歐洲の大國は、悉く支那を搾取し、支那を犧牲にして自國を富まし始めたのである。然らば何故日本—亞細亞の强國たる日本—が歐洲諸國の爲す所と同樣の事を爲し、東洋の富源を涸らさせないやうに、西歐諸國を遠ざけて惡いのか？　之が抑も日本を驅つて發展に乘出させた帝國主義的論理である。

過去四十年の間、日本は支那政府から權益を無理取りする機會を一度も失はなかつた。而して日本は其間西歐諸國の勢力を徐々に而も確實に減殺しつゝあつた。日本の最大競爭國は露國、英國、米國及獨逸であつた。一九〇四—五年の日露戰爭で、日本は基督敎の一帝國を打負かすことが出來た。世界大戰爭では日本は支那の地圖から獨逸を消し去ることが出來た。併し日本は英國と米國との勢力を奪ふことが出來なかつた。而して其間に一度打敗られた露西亞が、新に武器を整へ、非常に强大になつて、ソヴエト・ステートとして復活して來たのである。

支那の崩壞は十九世紀の後半に始まつた。英國、露國、獨逸、其他諸國及米國は支那を壓迫して、香港、上海等の如き貿易市港を獲得したが、之は實に支那領土の分割であつたのである。丁度前世紀の終る前に、日本も亦西歐諸國の策略に倣つて支那

と交渉した。支那の南東に横はる臺灣は、一八九四―五年支那との戰爭に於て、日本の獲得したものである。南滿の旅順口及樺太の南半分は、一九〇四―五年の日露戰爭後に日本の手中に歸した。又其頃に日本は關東鐵道と、滿洲を走つてゐる支那東方鐵道の南線とを獲得し、夫れに依つて南滿洲を日本の勢力範圍に收めて了つた。前に支那の領土であつた朝鮮は、一九一〇年に公然日本に合併されたが、面白いことには、一八九四年に支那と干戈を交へた時には、其獨立を保證したのであつた。世界大戰の間日本は獨逸に宣戰を布告して、直に青島其他山東の獨逸領を領有した。一九一五年日本は、西歐諸國が悉く戰爭に忙殺されて居るのを見て、二十一箇條の要求を支那に突附け、而して右の權利の讓渡を支那に追つた。大戰後日本は奪掠の分配物として獨逸の太平洋諸島の委任統治權を得たが、之は戰略的に見て米國からフイリッピン群島に至る直線を横斷して居るのである。日本は此合併したるものを同化する必要上、暫く其膨脹に手を緩めた。次の熱狂的活動の時期は一九三一年に滿洲の征服を以て始まり、以前に支那の領土であつた滿洲國が、丁度一八九五年の朝鮮の如く、名前丈けの獨立國として打建てられた。一九三一年から繼續して來た現在の膨脹論者の進路は、彼の有名なる(又は寧ろ名打ての)一九二八年の田中メモランダムに依つて知ることが出來る。夫れに依れば、日本の亞細亞大陸に於ける今後の發展は明に記載されて居るのである。此簡單なる史的概觀から、日本が此地球上今少しく自分の手足を伸ばす場所が欲しいと云ふ決心は、確立不動のものであることが明瞭である。

日本の內部の經濟を科學的に研究すれば、一九三一年以來の日本の軍事的侵略が判明して來る。日本の人口が增加し、其領土は既に現在の人口を容るゝに足らざるを見れば、新領土に向つて日本が手を差伸べるのは了解に難く無い。日本の工業制度を見れば、遠國から總ての重要な原料卽ち木棉、羊毛、パルプ、鐵、石油等を輸入しなければならない。此工業制度の擴張する所以も、領土に對する欲求の夫れの如く、人口の增加に基因するものである。故に日本が大人口を保持する爲には、原料の安全なる供給を要し、工業の擴張は更に新市場を欲するやうになつて來る。さて然らば、一體何うして總て此等の要件を滿さることになるのだらうか。支那は自發的に日本の植民地として、大領土を投出すだらうか。又は原料の資源及其廣大なる市場を日本の利用するに委すだらうか。支那は決してさうはさせない。國家の名譽と利害問題が、其間に這入つて來る。其上に、歐州諸國及米國が自由に日本を許して、支那の資源と其市場を獨立させはしない。彼等は徹頭徹尾總ての强國が支那を掠奪出來るやうに、門戶開放政策を固執する。夫れで日本は力に依つて支那領土を押へなければならない。日本は肉の一片を得ては之を消化して、段々に之を保有して來た。日本が支那を攻擊する前には國境事件が起り、之が旨く日本軍の侵略の口實に利用されるやうに仕組まれる。印度の西北境を見ても、アビシニヤのワルワルを見ても、極東の滿洲國境を見ても、計略は同樣である。

極東に於ける日本の帝國主戰的欲求は、若し日本が白人種を一掃して、門戶解放政策の如きは隱に之を廢棄し、支那全土に覇權を打建つることを得れば、始めて滿たされるのである。日本の政治家は幾度も同一のことを繰返した。例へば日本の代辯者は、日本は極東に特殊の利害關係を有つて居るが、夫れは他の西歐諸國の關係のやうなものでは無い、又極東の諸問題を審判し、其處に平和を維持するのが日本の使命である等々と屢々言明して居る。無論日本人は純然たる經濟的動機の外に、一大帝國を建設する念に燃えて居て、敗北したこと無き人種としての自覺が、其帝國主義の貪欲を旺盛ならしめて居る。又海外に一帝國を建設するといふことは、日本國內のファシスト分子をして優勢ならしめることになる。

若し支那にして日本の政治上又は經濟上の宗主權若くはパトロネージに屈することが出來れば、日支の衝突は直に止まるのである。之が日本の有名なる外交官廣田が過去三年間常に成功せんとして居たところだ。彼の言葉は絕えず日支協力を訴へて居て、表面上非常に調停的であつた。然るに此協力の目的は何であるか。明に日本の富むことであり、而して支那の奴隷化することである。併し乍ら、此赤裸々な眞理は、表面上『共產主義に對する共同防衞』といふスローガンに覆はれて居る。此スローガンは日本人の動機を隱すに役立つばかりでなく、同時に日本、支那、又は其他の總ての反社會主義分子に好く響く。斯くて去る八月七日の印度の新聞紙は、次の如き廣田の外交記事を載せて居る。

『廣田は衆議院に於て、支那に對する日本の要求の重大なる點は、共產主義に對し協力して共同防禦に當ると云ふことを宣言し、若しも支那に於ける過激分子、特に共產主義者が鎭壓出來れば、日支の協力は可能なりと信ずる旨を述べた。彼は日本政府は北支事件を局地解決せんと欲し、同時に日支關係の根本的改正を爲さんと欲して居る旨を附言した。』

廣田は初めて外務大臣になつてから、此同じステートメントを同じ言葉で再び發表した。支那は平和を齎すのであつたなら、此要求に應ずるだらうか。余の考では、南京中央政府のディク

テーターたる蔣介石は、若し自分だけに委せられたならば、或はさうしたことであらうと思ふ。彼の本心は強い反共産派であり、一九二七年に彼が支那の政權を掌握しようとして居た時に、國民黨に分裂が起つて以來、支那共産黨と其仲間を根絶せんと全力を盡して居たことがある。而も彼は二方面から絶えず壓迫を受けて居た。卽ち第一に、支那のソヴエト・ステートとして知られた西部諸州は、實際南京から獨立して居たので、日本に對して常に衝突を繼續して來た。而して此點に關しては支那大衆の感情を忠實に反響して來たのである。第二に、支那に大なる利權を有し、東洋の人種の前に其威信を保たうとして居る西歐諸國は、容易に手を引いて逃出すことが出來ない。支那に於ける米國の投資は、其額から云つても、其重要さから云つても、ラティン・アメリカ(中央及南アメリカ)に對する投資額に次いで居る。支那に於ける英國の投資に就ては、本年八月十九日の倫敦タイムスの次の如き拔萃が能く說明して居る。

『英國の支那に於ける直接の投資は約二億五千萬磅に達し、內二億萬磅は事業の投資であり、五千萬磅は政府の借金である。其全額の內一億八千萬磅は上海に投ぜられたものであり、其一億八千萬磅の內の大部分は蘇州河北方の居留地帶に投ぜられて居る。之が今最も多く砲擊を受けて居る地方である云々。』

尙タイムス記者は驚いて附言して居るのに、此地方は前に英國の監督官の下に警察が行はれて居たのであつたが、警察署は明渡されて今は日本人が占有して居る。白人種は日本人が支那の覇權を掌握すれば、支那の屈服を意味するばかりで無く、極東から自分等を追出して了ふことを能く知つて居る。

凡そ一國の地理は、其國の軍略を決するが故に、今玆に支那の地理を少しく研究して見よう。

支那の最重要なる交通線は三大河である。卽ち北方に於ける黃河、中央を流るゝ揚子江及南方の西江である。西江の入口は香港の英國の港に依りて支配され、上海の揚子江は英米を主とする外國に依りて抑へられ、而して黃河の入口は日本に依りて監視されて居る。支那に入る一つの陸路は、北からの夫れである。此通路に據りて、蒙古人も、滿洲人も、支那本土へ這入つて來た。夫れから歐洲大戰前には、露西亞も、日本も、之に著目して居た。一九三一年以來、日本は此路と附近の國土を手に入れようと狙つて居て、本年七月以來戰爭が此地域に行はれて來た。此事に關して高山連峰が支那の西部(新疆卽ち支那土耳古斯坦)から支那本土を分離して居ることを記さなければならない。其結果支那本土に入るには總て北方の陸路からであつて、歷史を見ても、滿洲を支配した國は、何時も支那を支配する確乎たる地位を占めて居た。

一九三一年以來、極東に於ける出來事を理解する爲には、日本の戰略の大要を知らなければならぬ。平和的侵入に由る日本の支那に於ける覇權の樹立は不可能であつたので、此度は支那を征服し、又は少くも支那に軍事的壓迫を加へんとする目論見を立てた。而して此目的を遂行する爲には、日本は二つの策略を行はなければならない。一は支那の統一を破ることであり、二は他國をして支那の援助を不可能ならしむることである。若し日本が、滿洲、蒙古及北支を含む支那の北部全部を押へることが出來れば、此目的は初めて遂行し得られるのである。此等の地方は一緖になつて、支那本土(黃河、揚子江及西江の流域)から、露領シベリヤを隔離して居るのである。若し日本が此地方を占有せんか、露西亞との戰爭の場合に。外蒙古から進擊して行つて、バイカル湖でシベリヤ鐵道を橫斷することが出來る。而して露西亞を完全に孤立せしめんか、一朝事ある場合に、何國と雖も支那の援助に來ることが出來ない。次に一九三一年以來、日本は如何にして此地方を漸次に蠶食したかを述べよう。

先づ日本は自分の狙ふ所を總べて明かにしない。而して注意して徐々に侵略に取りかゝる。其上に何時も何か事件を惹起して、支那の領土を占領する口實を求めようとする。最初の事件は、一九三一年九月十八日南滿鐵道の沿線を探査して居た日本陸軍の河本中尉に由つて起された。此が奉天占領となり、間も無く滿洲全土の占領となつた。當時全世界は經濟的不況甚だしく、露西亞は最初の五箇年計畫に熱中して居た。夫れで日本は、此劫掠的行動に誰も容喙するものが無いだらうと思惟して居た。國際聯盟のリットン委員會は、日本の事を好く言はず、續いて聯盟は日本の滿洲占領を非難し出した。併し日本は聯盟に見切りをつけて、遂に脫退して了つた。此に續いて一九三三年にソヴエト・ユニオンは、滿洲に支那東部鐵道を賣却し、夫れから一九三四年に露滿水路協定が成立した。滿洲は未だ世界列國から承認を受けて居ないが、事實上多くの國々から既に承認されて居る。

滿洲は廣大な領土であつて、氣候は寒いが植民の土地は十分にあり、又石炭其他の原料に富んで居る。又ソヴエト露西亞と戰爭が起れば、日本に取つて飛石傳ひに頗る有利である。多くの人々は、日本が滿洲を開發するには、何年かゝるか知れない、其間極東に平和があるか何うか分らないと考へて居る。併し此觀察は誤つて居る。一體滿洲は、經濟的にも、軍略的にも、獨立することが出來ない。其處には日本の欲する原料の唯一部分がある丈けであり、又滿洲の市場は日本に取つて餘り大きくは

無い。其上に滿洲は戰略的に四邊に敵意を有する領土を控えて居て非常に弱い。故に日本の經濟的必要を充たし、而して新國家の安全を期する爲には、日本は更に侵略行爲を擴大しなければならない。

一九三二年に、他の事件が上海に起つて、日支間の事變が始まつた。結局支那は上海附近の或地域を停戰地帶とすることと、其他二三の日本の要求を突附けられたからである。上海の戰略上の重要さは、一九三二年迄は未だ判らなかつたが、現在の戰爭(一九三七年)では明瞭となつて來た。

一九三三年に滿洲の統一は、溥儀皇帝の下に完了されたから、日本は國境を廣めんとして、戰爭は滿洲の國境外の北支那に起り、日本兵は熱河及察哈爾を攻擊し、北京の城門迄進んだ。戰に敗れた支那兵は日本兵に屈し、彼等の領土が又々日本に依つて併合せられた。此戰爭は一九三三年の塘沽停戰協定で終つた。

一九三四年は比較的に平靜であつたが、敵對行爲は又候一九三五年に始まつた。日本は何時もさうであるが、新に侵略を始めようとする時に、前以て懷柔的言辭を用ひ、外交政策上峻嚴ならざる態度を示す。一九三五年一月二十三日に廣田は支那と接近の考を以て、非侵略策と善隣策を標榜したことがある。此時に日本人の採用したスローガンは、北支の自治であつて、南京の中央政府は、日本の北支に於ける活動と交渉には口を出してはならないと云ふことであつた。然し南京は悉く日本の言ふ通りになることを望まず、北支の人民も亦一九三一年に滿洲の轍を踏んで日本の陷穽に落ちることを欲しなかつた。其結果日本の計畫は成功しなかつたが、而も結局衝突が終つて見れば、支那は實際に他の領土の一部を取られて居たのであつた。一九三三年に熱河と察哈爾の一部とが滿洲に合併された。夫れから停戰地帶が河北省に設けられ、夫れを冀東自治區と呼んで居た。此地方を治むるに殷汝耕が居て、領土は日本の支配の下にあつた。(此處で大規模の密輸入が行はれた。)次いで河北省の殘部(北京と天津を含む)と察哈爾の一部とが、南京外の最も強大なる首領の宗哲元を戴いて、冀察政權區の名の下に別々の行政單位で結合した。此政權區は、一方には公然日本に反對するを恐れつゝ、南京とは其聯絡を斷たなかつた。

一九三六年二月に東京に兵亂が起つて、日本政府は一時其方に氣を取られた。夫れでも全然何事もせずに居ることは無かつた。國際的に地位を强固にする爲に、日本は獨逸と共に日獨防共協定を結んだ。一九三六年十一月に、京綏線に沿うて內蒙古に入らうとしたが、日本の蒙古滿洲の傭兵は、綏遠省に於て南京軍の援助を得た傅作義の軍隊に依り、窮境に陷つて了つた。

一九三一年以來日本は、極東ばかりで無く、一般の世界の事柄に關して、非常に積極的になつて來た顚末は、歷史を研究して居る者には、誰にも判つて居ることである。若し日本が國際的方面に强大で無かつたなら、支那に對する攻擊などは決して敢行しなかつただらう。吾々は現に日本が滿洲を手に入れて、國際聯盟を脫退したことは說いた。此に先立つて、日本は日英同盟を其經過に委せたが、多分日本は其が無くとも十分力强く感じたが爲であらう。ワシントン海軍條約に於て、日本は英米との間に、軍艦等に關して五・五・三の比例に贊成した。一九三五年此條約の期限が經過した時に、日本はパリティを主張し、此が倫敦會議で他の國々の贊成を得なかつたから、其會議から脫退して了つた。總べて此等の事實から一九三七年が明けると、日本は極東に於て國際的に一大事變を起す用意をして居るのだと云ふことが判かる。

併し時に依ると能く知つて居ると思ふ者でも、迷はされることがある。本年三月から七月迄、日本は經濟的危機を經過しつつあり、隨つて支那に對して軍事行動を取り得ないと全世界に思はせて居た。米國の新聞記事を見れば、世界の多くが經濟囘復を樂みつゝあるのに、日本では苦んで居ると云ふことが出て居た。此囘復の故に總べての原料の値段が昇騰した。日本は其高くなつたものを買はなければならず、而して生產費は高くなり、世界の市場に於て競爭など出來るものでは無い。(此記事は現時印度に於ける日本製織物の著しく安價なるを見れば反證される。)米國のジャーナリストは、此經濟的危機の故に日本は支那と事を構へず、友情の手を差伸べて居ると論じ、又同じ理由に由つて、軍人の過激派は一時歡迎されず、穩健なる政治家が優勢であると論じて居た。今から見れば、日本の穩健なのは敵を安全に思はせ、自分の計略を隱す口實に過ぎなかつたのだ。日本は支那を攻擊するに當つて、此特別なる瞬間を選んだのは、明白なる理由がある。米國も、英國も、露西亞も、未だ日本に挑戰する用意が出來て居ない。彼等の總べては準備に熱中して居て、武器を一生懸命に造り出しつゝあり、二三年後には日本の前途は危い。夫れで日本は、『今こそ』遣るべきであるとして取懸つたのだ。日本は眞面目なる言辭と、穩健なる行動に依つて、此攻擊を準備するに注意した。而して何人も日本は平和の心を以て考へて居ると確信せる際に、愈ゝ攻擊を遣り出した。本年四月二十四日に、紐育の有名なる雜誌ネーション誌上に、『極東に於ける平和の見込は、一九三一年以來今日に過ぎたるもの無し』と書いて居る。又六月二十六日に同雜誌は、日本の支那に對する攻擊的態度は鎭靜になつて來たと書いて居る。併し

年ら、夫れが暴風雨の前の靜けさであつたといふことを、其記者は少しも知らなかつたのであつた。

日本の進擊の一般的準備から、別に或要素が極東に於ける現在の危局に急落して來たものがある。昨年十二月に於ける蔣介石の監禁は、支那のユナイテッド・フロント・ポリシーの地盤を作つた。蔣介石が監禁者に解放さるゝ前に、日本に對する共同防禦の基礎の上に、支那のソヴエトと南京政府との間に一つの話合ひが附いたことに今は何等の疑ひも無い。此了解は最近の歷史に於て、初めて支那の統一の出來たことを意味したのであつた。支那のソヴエトは其共產主義と分離主義とを放棄して、南京の指揮に屈しなければならなくなつた。蔣介石は聯合支那に將として日本の攻擊に當り、而して共產派の首領周恩來と、蔣の息子とが彼と協力すると云ふことであつた。日本は之を知つて、聯合支那が其結合を固める前に攻擊を開始した。

當時は日本に取つて種々都合の好い時であつた。英國、露西亞及米國の武裝が、迅速に進んで居たとは云へ、何れも未だ戰爭する程の用意が出來て居なかつた。英國としては新嘉坡根據地を完成するには、尙時日を要する。米國が中立法を採用したのは、國際間の衝突には關係したくない證據である。露西亞の軍隊は、ファスシストの報告に依れば、不平を以て煮えくり返つて居て、十二箇月前のやうに怖る可きものでは無い。蘇滿國境に於ける衝突、次いで係爭中の支那と一八六〇年の協定で露西亞に屬して居た島から、本年七月四日に露兵を撤退さしたと云ふことは、露西亞は未だ戰爭の用意が出來て居ない今一つの證據である。

黑龍江から露兵が撤退して三日目に新しい事件が北京に起つて、北支の攻擊が本年七月八日に開始された。

諺に依れば、人間は不幸に襲はれると利口になると云ふことがある。國際的な事件に通曉して居るジャーナリストの報告に依れば、日本は過去暫くの間戰爭の用意をして居たと云ふことである。日本は滿洲の占領を以て滿足して居なかつた。滿洲は日本の移民には寒さが强過ぎる。又原料と云つても日本產業の要する僅かばかりのものを出すに過ぎない。無論日本の貿易は幾分か增加したが、行政費とか日本市場に於ける滿洲品の競爭の結果被つた損失とかを考慮に入るれば、相殺されて了ふ。之に反して、北支（山東、河北、察哈爾、山西及綏遠の五省）は、經濟的には滿洲よりも遙に豐富である。察哈爾、山西及河北には鐵坑がある。山西には良質の石炭がある。其上に、錫、銅、金及石油は五省の間に散布して居る。黃河の流域は、日本が今印度及米國から年々四億圓を輸入して居る木棉の栽培に適して居る。氣候も亦滿洲よりは日本移民に好く、其他家畜を養ふに適して居る。

日本は曾て此地方の開發の計畫を立てたが、其地域が支那の主權の下にある間、日本の資本は來なかつた。夫れで軍國主義が資本主義の援助に遣つて來た。

現在の侵略の背後には、心理的要素が潛伏して居る。米國のジャーナリストは、本年初日本の經濟危機を報じたことは一部分正しかつたが、其結論は間違つて居た。彼等の報道に反して、經濟的困難は國內の不平を防止する爲に、政府をして戰爭を起させることがある。日本の場合に於ては、日本が其國際貿易の均衡を保つ能はざる結果として、戰爭心理の復活を必要ならしめたと云ふことが確證され得る。

其上に一九三六年十一月に北支の一省綏遠に對する遠征軍の敗北の後、內蒙古の戰略的地域は、北支の全部が屈伏してからでないと手に入れることが出來ないと云ふことが判明した。特に察哈爾、綏遠を支配すること無しに、內蒙古へ滿洲方面から侵入することは不可能である。

何故日本は經濟的價値の少き不毛の內蒙古に夫んなに執著して居るのか。夫れは經濟よりは寧ろ戰略の必要に由つてである。卽ち日本は、滿洲、北支那及蒙古を含む地方を一團にして置きたいのである。ソヴエトの外交を見れば、決してぼんやりして居れず、支那の二つの大きな省が、既に露西亞の勢力範圍に入つて居る。新疆及外蒙古とが夫れだ。新疆は戰略上日本には餘り必要では無いが、併し外蒙古は關係がある。其外蒙古を擁して居ると、ソヴエト露西亞は容易に北支那に下つて來られる。此を妨げて支那本土から永久的に露西亞を遮斷して了はうとする唯一の途は、內蒙古と北支とを占領して、西から東へ一つの廻廊を作り、之に依つて支那本土から露領シベリヤと外蒙古とを隔離して了ふことである。此地方を合併するのは、現在の日本の目的である。一度日本が之に成功すれば、次には此新領土を通じて東から西へ、軍略上の鐵道の敷設に著手するだらう。若し日本が其地位を固めることが出來れば、此度は外蒙古に動かうと考へるだらう。そこで何んなことが起るか、今からは豫言は出來ない。現在外蒙古は露西亞の勢力範圍になつて居る。而してソヴエト政府は、此領土內に日本が手を下せば、宣戰の布告に等しいと云ふことを、はつきり公言して居る。

併し日本は、何時か一度自國の主權の下に、全蒙古を結合せんとする希望は捨てずに居る。夫れで日本の政治家は、全蒙古國を以て總べての蒙古人の守るべき政治上の理想なりと敎へて居る。若し此計畫が實際化するとなれば、之も滿洲國の兄弟分

となる譯である。夫れは蒙古人に對して、無論表面丈けは彼等自身の國家を與へるのであるが、實際は日本人の保護の下に國家を建設することである。極東には略五百萬の蒙古人が居る。二百萬は滿洲の興安省に、一百萬は外蒙古に、尙一百萬は內蒙古に、夫れから一百萬は新疆、西藏及ソヴェト露西亞に散在して居る。未來の蒙古ステートの核心は旣に蒙古政治會議で成立して居る。日本の勢力の及んで居る蒙古要人は李守信と德王とである。

日本に取つて此蒙古自治國は將來の計畫であるにしても、北支自治は直に實現すべき目的である。

滿洲の併合以來、日本の北支に於ける勢力は著々として進み、近き將來北支五省を含む尙一つの傀儡國が出來るだらうと云ふ形勢であつた。併し之より前に南京の勢力に廣東の加はつたこと、次いで昨年十二年に支那共產黨と蔣との妥協は、日本の希望を打破つて了つた。遂に强い支那の聯合軍が世界の前に現はれて、一戰爭を遣らなければ北支を手放さぬ勢ひとなつた。本年一月以來、南京は北支那の要人の上に勢力を持ち始めた。日本の爲す所に干涉して、冀東を通過する密輸入を監視し出した。支那の了解無しに日本の設けた天津—東京の航空路を中止させんとした。北察哈爾に於て、日本の支配に對し、滿洲と蒙古の

軍隊の間に小規模の反亂があつた。反日本的事件は斯くて屢々起り、日本の要求に屈服するもののみでは無くなつた。之に加ふるに、南京と支那共產黨との間に了解が成立し、日本に對して共產黨に屬する九萬の新鋭兵を送り出すといふ報告があつた。

本年七月三日に、日本の川越大使は南京と交涉を開始した。日本は南京が滿洲國を認めて、日本と經濟的協力を取るならば、北支に於ける日本の政治支配を放棄しても良いと申込んだ。南京は此申込を拒絕したと云ふことであつた。今や新支那が起つて、北支に其十分なる權威を行ふだらうといふ形勢を示した。そこで日本は直に北京の西約十八哩の蘆溝橋で一事件を演じた。卽ち日本軍が夜間演習を行つて居る時に、其地方に駐屯して居た支那の二十九軍の兵隊と衝突した。

法律上此事件を見ると、日本人の惡いことには毫も疑ひが無い。一九〇一年の國匪覺書は、北京の大使館內及北京天津鐵道に兵隊を置くを許したけれども、彼等は特定の地域外に兵隊を送つたりした。兎に角衝突が起つてから、日本政府は直に次の如き要求を提出した。

（一）北京の西現在の線から二十九軍を撤退せしむること。

（二）責任者の處罰。

（三）北支に於ける總べての排日的行動を充分取締ること。

（四）共產主義に對する取締の勵行。

冀察政權は七月十九日に此等の要求に應じたことが報ぜられ、其條件が七月二十三日に東京で發表された。支那側の期待は、支那兵も日本兵も其地帶を撤退することであつた。併し日本軍が其地帶を退かなかつたから、支那の軍隊も退かなかつた。七月二十六日に日本の司令官が、支那兵は七月二十八日正午迄に退くべしといふ最後通牒を發した。支那兵は撤退を拒絕し、そこで日本兵は力で支那兵を追拂はうと遣り出した。之が戰爭の原因である。

南京のデクテーター蔣介石は戰爭の用意は無かつたが、日本に對して立上つた。最早や一戰無しに屈するやうなことが無いだらう。

日本は長期の戰爭の用意を爲して居り、日本の內閣では旣に此戰役に大なる金額を充てて居る。日本は明年一月末迄に戰爭を繼續する爲に一億一千七百六十五萬磅に達する金額を費消すると云ふことだ。

極東戰に於ける最近の展開は、上海區域に迄戰爭の擴つたことである。八月九日に新しい事件が上海の傍の虹橋飛行場に起つた。日本の海軍士官は、飛行場に這入らうとして居た時に狙擊された。夫れで日本の海軍は、之に對して復讐的行動を取り、

支那軍に對して、上海から三十哩の距離に退くこと及其區域內に設けたる一切の防備を取去ることを要求した。之に對する支那の返答は、却つて南京から上海方面に八十八軍の移轉であつた。日本人は之を以て一九三二年の協定の惡むべき違犯なりとした。併し支那は、日本こそ支那の領土に軍隊を駐め、而して刺戟的に大艦隊を送つて、其協定の條件を自ら破つて居ると爲した。

斯くて戰爭は二つの戰場—北京及上海—に行はれて居る。日本軍は南京の軍隊が河北省へ向つた時に、陸の方で塞がれたから海へ向いた。蔣介石が防備堅固なるトーチカに依つて北京を取卷いた半圓形の軍隊は、大膽にして重要なる戰略的行動であつた。支那軍隊の左翼は、京綏鐵道の通つて居る有名なる山峽南口に、半圓形の中心は漢口鐵道の北京の南百哩なる保定府に、而して右翼は天津の三十哩以內に迄一周して居た。此半圓形卽ちヒンデンブルグ・ラインを破ることは、頗る困難なる事業である。夫れで上海を攻擊することに依りて、支那の抵抗を覆すべく戰略から見て決したのだ。

若し支那に中心があるとせば、夫れは揚子江口に於ける財政及商業の中心地である。日本は支那政府の經濟的基礎を危うし、國民的感情を阻喪せしめ、而して支那の中產階級を驚かさうと

して、外國支配の產業、商業及財政を攪亂する爲に、此中心を攻擊して居るのである。上海は明に日本海軍の掌中にある。而して此繁榮して發展止まざる都會の攻擊は、戰爭を急速に終了せしむる方法ではある。併し此突擊の結果如何は、戰爭より生ずる貿易の錯亂及物質的損害の範圍に係る。

戰爭は暫く繼續するであらう。日本は四肢を切斷する爲に、支那の心臟を痲痺させるであらう。支那は上海の戰爭で生きるか死ぬかしなくてはならないが、支那は果して夫れに堪へられるだらうか。若し廣東が武器の輸入に自由であり、上海に於ける戰爭に依る收入上の損失が餘り大きくなければ、戰爭は多分日本の社會的及經濟的安定を危くする程、永くかゝるかも知れない。

支那は一九三一年の時の如く、今度も國際聯盟に訴ふる所があつた。併し斯くいふ急場の場合に、瀕死の聯盟など何にもなりはしない。無論世界の同情は支那側に在る。併し世界の同情などは、力の機關銃と對抗させると、餘り値打は無いものだ。支那に對する見込は甚だ悲觀的であつて、運は支那側に在りと云ふ如き見解は、最早正しく無い。唯支那の成功を神が許されんことを。

日本は日本の爲に、又亞細亞の爲に大事を惹起した。現世紀の當初に於ける日本の覺醒は、吾々の大陸を通じてスリルを送つた。日本は極東に於ける白人の勢力を打破り、而して軍事上ばかりで無く、經濟上の範圍に於ても、西方の總べての强國を守勢に置いた。日本人は、亞細亞人種として、自重心に就て非常に敏感である。尤もなことだ。日本は極東から西歐の諸國を追ひ出さうとして居る。併し此が帝國主義無しに、支那共和國を打破ること無しに、又光彩ある、文化に富んだ、而して古代からの人種を屈すること無しに、出來得ないものだらうか。否、日本に對して吾々は稱賛措く能はざるものがあるが、吾々の全同情は、困難を嘗めて居る支那に向はざるを得ない。支那は尙生きて居なければならない。支那の爲にも、亦人類の爲にも。此事變の灰の中から、支那は過去に於て屢々爲して來たやうに、又謎のやうに興つて來るだらう。

吾々をして此極東の事變を學ばしめよ。新時代の玄關に立つて、印度をして國民的自己完成に志ざさしめよ。併し他國民を害すること無く、又自大思想、帝國主義の殘酷なる道を通ること無しに。

印度の國民性に就て

木村日紀

緒言

日印協會會報に對して久しく無沙汰したが、今回會報に何か書けといふ要求に接したので、右の題下で述べる事とした。僕は元來古代印度の研究者特に哲學、宗教が專門である。從つて僕としては古代印度に關する何かの研究を發表したいのであるが、然し現下の日支及び世界的非常時に直面しながら時事問題と全く懸け離れた問題を述べる事を快とせず、さりとて純政事問題に觸れる事を欲しない。よつてその折衷策として斯る問題を選んだのである。これによつて印度が將來如何に進みゆくか？の問題も讀者各自に推考し得る事と思ふ。

一、印度民族と印度の國民性

印度の國民性を理解する關係上その國民となつてゐる印度民族に就て一言する必要がある。古代より現代に亙る印度文化は第一期『印度王國時代』（西曆前一五〇〇——西曆七一四）、第二期『回教徒王國時代』（西曆七一四——一七六七）、第三期英領印度時代（西曆一七六七——現代）等の三期に區別される。而して印度獨特の文化は第一期に於て發生し成熟し又發達したものであつて同時にそれが印度文化三期全體の中心となつてゐる。而して第二期第三期の文化は外來の侵入と外來文化の接觸とによつて成立したものである。この第一期の文化に現れた國民性こそ所謂印度の國民性にして現今の印度に於ても認められるものである。而して斯る文化を建設しその國民性を築いた人種が所謂印度民族である。人種學、言語學、宗教、風俗、習慣等の研究によつて現今の印度民族中に文、野を加へて其數多數に上つてゐる事が明となつた。印度國勢調査報告によると現今の印度民族は（一）土耳古、イラーニアン種族、（二）印度アリヤン種族（三）月氏、ドラヴィデアン種族、（四）アリヨ、ドラヴィデアン種族、（五）蒙古ドラヴィデアン種族、（六）蒙古種族、（七）ドラヴィデアン種族等の七種に分類されてゐる。斯く横に各種族の混血の行はれし事は、古代印度民族が古代文化を造り上げた後に外來侵入の種族と印度古代種族との混血によつて發生したものである。其處で外來侵入種族として西方から來た系統のものとしては佛陀時代に波斯のダリウス王によつ